

資料

Research Note



恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークの 2013 年再認定審査における条件付き再認定とテーマの再設定について

Result of Revalidation Report of the Dinosaur Valley Fukui Katsuyama Geopark in 2013, and the Reestablishment of the Geopark Theme

畑中健徳*

HATANAKA Takenori

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会事務局

Secretariat of the Dinosaur Valley Fukui Katsuyama Geopark Promotion Council

2015 年 6 月 3 日投稿, 2015 年 12 月 21 日受理

要 旨

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークは、2013 年 12 月、再認定審査を受け、日本ジオパーク委員会から「条件付再認定」という結果が出された。その原因は、当地域が当初、ジオパークのメインテーマを恐竜、恐竜化石としたことで、地域の人々に『ジオパーク＝恐竜』というイメージが定着してしまっただけと考えるようになり、ジオパークの新たなメインテーマとして「恐竜はどこにいたのか？大地が動き、大陸から勝山へ」を設定した。ジオパークの活動を進めていくうえでは、勝山の地域性を念頭に置き、それをジオパークの活動と調和させ、活動を発展させていくことが重要である。

キーワード: 恐竜, 恐竜化石, 再認定審査, 地域性

Keywords: dinosaur, dinosaur fossil, revalidation, locality

はじめに

世界および日本ジオパークネットワークには、加盟後 4 年に 1 度再認定審査を行う制度が取り入れられている。ジオパークの品質保持および持続可能な社会の形成のための地域活動をチェックする仕組みである。この再認定審査の判定結果には、1) 今後もジオパークとして 4 年間の活動が認められる「再認定」、2) 2 年の間に是正改善が求められる「条件付再認定」、3) 今後のジオパークとしての活動を認めない「認定取り消し」の 3 種類が存在する。

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークは、2009 年 10 月に日本ジオパークネットワークの加盟認定を受けた、福井県勝山市全域をエリアとする日本ジオパークである。しかし、2013 年 12 月、日本ジオパーク委員会による再認定審査の結果、日本ジオパークネットワーク初の「条件付再認定」という判定が下った。この結果は、通常は 4 年後に行われる再認定審査が 2 年後（2015 年）に行われ、それまでに指摘事項等の是正措置や取組みがなされたのが、審査されることになる。そして、指摘事項の改善が認められない場合には、「認定取り消し」の判定を受けることになる。その後、推進体制の強化や指摘事項、

課題の是正に向けた取り組みを進めている状況である。

ジオパークというシステムが今後も発展的に機能するためには、再認定審査という仕組みは重要であり、特に当地域のように、「条件付再認定」を受けたジオパークが、審査後にどのような活動を展開しているのかを記録することは、今後のジオパークの制度をよりよいものにする上で重要なデータになると考えられる。

そこで本論では、まず恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークが、再認定審査時に指摘された事項について整理する。次に、これまでの当地域における課題や問題点を洗い出し、今後の活動に向けた展望について論じる。

再認定審査で受けた指摘

当ジオパークが、日本ジオパーク委員会から再認定審査の結果とともに指摘された事項は以下のとおりである。

- 1) ジオパークとエコミュージアムとが全く別の活動に位置付けられている。
- 2) 拠点施設として位置付けている福井県立恐竜博物館がジオパーク全体の拠点施設となっていない。
- 3) 恐竜化石発掘地露頭の保全計画が考えられていない。

海外の化石販売を行っている。

- 4) 恐竜博物館におけるジオパークの活用法が不明である。
- 5) 運営組織、事務局体制が脆弱である。
- 6) 日本ジオパークネットワークの一員としての活動が不十分である。

2年間の条件付再認定という審査結果が上記の指摘事項とともに出された後には、地元の新聞等では様々な報道がされた。「恐竜頼みに警告」、「資源活用不十分で再審査」などという見出しが並んだ。

恐竜、恐竜化石への依存

今回の条件付再認定という結果の根本的な理由は当ジオパークの「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」という名称とメインテーマである「恐竜、恐竜化石」に現れているのではないかと考えられる。

日本ジオパーク認定前後から当地域では、当ジオパークが、「恐竜、恐竜化石をテーマとするジオパーク」であるという説明がなされてきた。そうした中で、『ジオパーク＝恐竜』というイメージを広く定着させてしまっていた。このことから、恐竜化石以外の地形・地質遺産やそれに関連する活動がジオパークとは無関係であると理解されてしまっていたと考えられる。白山平泉寺旧境内でガイドしている、ある観光ボランティアガイドから発せられた「平泉寺は恐竜じゃないからジオパークじゃないね」という言葉がこのことを象徴している。

確かに、当ジオパークにとっての「恐竜、恐竜化石」は主体となるテーマではあるが、それだけに依存しすぎたことにより、本来様々な地域住民が参加して行ってきた活動がジオパーク活動として認識されず、広がらなかったのではないかと考えられる。勝山市全域をエリアとしているにも関わらず、「恐竜、恐竜化石」という狭いエリアの中での限定的なものにしてしまうことで、ジオパークから地域の人たちの興味や関心を逆に引き離れたのではないかと考えられる。

当ジオパークの日本ジオパークネットワーク加盟申請時の申請書は、地域住民からの意見の汲み取りが不十分なままに作成された。そのため、以前からエコミュージアム活動で行われてきた全地域的な活動を取り込まず、単に恐竜に関わる団体や個人を取り込み、それに特化した活動が行なわれていた点は、反省すべき事項である。申請書の中では、「ジオパークによるまちづくり」と「恐竜を活かしたまちづくり」の双方が述べられていたが、それらを有機的につなげる具体的な考えがなく、これら2つのまちづくりのギャップを埋めないままに4年の時

間が経過してしまったといえる。

ジオパークとエコミュージアム

次に、指摘事項中のジオパークとエコミュージアム活動の乖離について述べる。バブル経済がはじけた2002年以降、地方分権の気運の中で、勝山市はエコミュージアムという手法を用いてまちづくりを行ってきた。

エコミュージアムとは、エリア全体のフィールドを屋根のない博物館に見立て、その地域にある自然、歴史、産業遺産に注目し、遺産を保存、活用することで、「その土地らしさ（地域性）」を醸成し、地域住民が地域に対して誇りを持って暮らすことを目指すシステムである。

再認定審査では、審査員よりジオパークとエコミュージアムの関係性について多くの質問があった。勝山の場合、双方ともエリアが同じであるのにもかかわらず、当初の認定時に双方の活動の整理や地域住民への十分な説明がないままに、別々の活動としてスタートしてしまった。本来、当ジオパークは、エコミュージアム活動の中で発見、再発見されたものを、ジオパークの構成遺産として取り扱い、同時並行的に活動が行われるべきだった。実際、当ジオパークを現在牽引する民間グループなどは、エコミュージアム実践者やエコミュージアムから派生したグループである。ジオパークのメリットを感じている個人やグループは、双方の概念を理解し区分することなく活動を行ってきている。

かつて、全国的なブームが起こり、各地で行なわれてきたエコミュージアム活動の中でも、勝山市のエコミュージアムの事例は現在も地域住民を中心に息の長い活動が行なわれている。しかし、その活動もエコミュージアムの概念から見れば未だ完成形には至っていない。梶原（2014）は、日本のエコミュージアムの主な問題点として、1) 学問的担保、2) リファレンス性、3) マネタイズ、4) 拡張性、5) 倫理哲学を挙げているが、当地域もこれらの問題が存在する。その問題解決のためには、今後はジオパークとエコミュージアムの双方の活動を通して、互いのもつ利点と欠点を補完しあうことが重要であると考えられる。

テーマの再設定と今後の展望

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークは、これまで地形・地質遺産を恐竜時代のサイト群「恐竜、恐竜化石」、火山系のジオサイト群「火山と火山活動」、九頭竜川のはたらしによるジオサイト群「地質・地形遺産と人々の暮らしとの関わり」という3つのテーマとエリアに区分され

ていた。しかし、これらのエリアやジオサイト間の関連性は弱く、ジオパークの醍醐味である大地や自然と人との関わりをジオストーリーとして見せることが極端に弱かったと言える。

そもそも勝山に暮らす人々は、本格的に恐竜化石調査研究が始まる 1989 年以前から、恐竜や恐竜化石以外の地域資源や気候・風土、歴史、文化、産業などに愛着や誇りを持ちながら、この地で生活してきたはずである。そこから、地域住民は地域の誇りを見いだしてきたのであり、「恐竜、恐竜化石」だけが勝山の地域性を象徴するものではない。

当地域には、古生代～現代に至るまでの間に解説できる地球活動の歴史や地質事情が存在する。そこで、再認定審査後、当ジオパークでは、「恐竜はどこにいたのか？ 大地が動き、大陸から勝山へ」を新しいメインテーマとして設定した。

新しくテーマを設定するにあたっては、当ジオパークが、「恐竜、恐竜化石」が大陸に生息していた時代から現在に至る時間軸の中で起こった様々な地球活動のイベント、地球の遺産や自然、人との関わりを楽しく学べる場所であるということが理解できるジオストーリーの構築を考慮した。すなわち、ジオ多様性、そして、ジオ多様性が影響を与え形成されてきた生物多様性や歴史・文化の多様性、独自性というものが、必然的に地域性の形成につながることを示すよう考慮したものである。

このように、本来、勝山で培われてきた地域性全体を取り扱うのが「ジオパーク」である。しかし、当地域はジオパークを、ジオパークの理念を理解しないまま、単なる「地質公園」や「恐竜王国」として実践してしまい、地域性の一部のみをジオパーク活動として進めていたのではないのかと考えられる。

まとめ

再認定審査の後、勝山の地域性とは何かを念頭に置きながら、それをジオパークに発展させ調和をさせていくことが重要であると考えている。

地域住民によく話しをすることであるが、恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークを恐竜に例えると、今の当ジオパークは「骨」だけの状態である。骨だけではジオパークにはならない。そこに、単に地域資源を付加するだけでなく、「勝山らしさ」、「地域の独自性」という意識や活動を加えることが必要である。そうでなければ、地域の遺産を保全する意識も出てこないし、それを学ぼうという気持ちも醸成されない。また、次の世代に語り継ぐことなくそれを活用して豊かになろうという意識もなくなってしまう。地域でジオパークをどのように活用し、どのようなジオパーク（地域）をつくりたいのか、明確なビジョンを持つことが大事である。地域の問題解決のためにジオパークが潜在的にもつ役割は大きい。それだけにジオパークの理念の下、多様な地域住民の力を結集し、地域住民一丸となって一步一步前進していきたい。

謝辞

執筆にあたり、本ジャーナル編集委員長である自然保護助成基金の目代邦康氏、北海道博物館の栗原憲一氏から、多大なるご指導をいただいた。そして、長年にわたり共にジオパーク活動に取り組んでいただいている当地域のジオパークアドバイザーの吉川博輔氏から多大なるご助言や励ましをいただいた。以上の方々に心より感謝申し上げます。

文献

梶原宏之 (2014) 類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割. E-journal GEO, 9, 61-72.